

# なのはな通信

第11号 2003.12



編集・発行

勤医会東葛看護専門学校

〒270-0174 千葉県流山市下花輪409

TEL 04-7158-9955 FAX 04-7159-7055

発行責任者 久保 知代恵



## 今問われる社会の姿

校長 三上 満

2課2年の「社会保障」の授業の準備で、アメリカの医療にかんする本を何冊か読んでみて、あらためて驚くことがあった。

アメリカには公的な健康保険の制度はなく、ほとんどの市民が民間の営利企業の経営する医療保険に加入し、いざという時に備えている。

それでも保険料を払えず無保険になっている人が15%ほどいて、年々増加しているという。「実際にアメリカの医療は、医療をもっとも必要としている人に振り向けられるのでなく、支払い能力のある人に対して振り向けられるという形になっています。」これは一人のアメリカの良心的な医師の証言である。

事実救急車で運びこまれた急患が無保険者であることがわかって、入院を拒否された事例もまれではないという。

さらに胸痛むのは、保険会社の保険金支払いを少なくするために（利潤を多くするために）患者を専門医に送るかどうかをきめる医師の制度があるという。一般医の治療でよしということになれば保険金の支出は少なくてすむ。この医師のことを「ゲートキーパー」というのだそうだ。病者にとって必要な専門治療への道に立ちほだかっている門である。生命と健康という、何よりも重い人権が、営利の支配の下におかれているのか。利潤本位という原理が、生きるギリギリの所まで買っているような非情な社会であっていいのか。人間の社会には損得めきでやらなければならないことがあるのではないのか。「苦惱する市場原理のアメリカ医療」という本を読みながら、怒りにふるえるような思いで、私はそんなことを呟いていた。「貧しい患者や非常に重症な患者者にとって、いい医師であるということは、実は保険会社にとってみれば高きつく医師であるわけです」これもさきに引用した医師の言葉だが、医の良心を守ろうとする人の怒りの告発である。

日本の医療に加えられてきたかすかすの改悪の攻撃も、実はアメリカのように医療の営利化、企業化、公的な保障の完全撤退を最終ゴールにして、じわじわと進んでいるのではなからうか。「私たちは金めあてなどということがはびこる医療の担い手には断じてならない。」去年の2科の総合発表で語られた言葉だが、そういう感性をもった医療者こそ育てられなければならない。

# 大会 2003 長崎

二〇〇三年夏、私は生まれて初めて原水爆禁止世界大会に参加した。平和について考え、平和を願っている若者が本当にたくさんいたことにおどろき、自分もその若者達と一緒に、その場に居

られたことが本当に嬉しく感動した。

分科会では被爆者のお話しを聞くことができた。原爆が落ちた日のこと、それからの辛い自分の人生を、涙ながらに話してくれた。また「戦争はあかん、若い人達で変えてほしい」と繰り返



なった。私達の未来の平和を願い、思い出すのも辛い体験を話してくれたいと思うと、私達がこのまま戦争がおこるのをだまっけて見ているだけではないかと思つた。被爆者の体験

を無駄にしないように戦争のことももつと学んで、たくさんの人に伝えていきたい。

三日間参加してみても、日本だけでなく、世界中の多くの人が、戦争はいけない、と思つていることがわかつた。自分の願

うことができた。この感動や学びを忘れずに、平和

への想いをもちつづけた。

(1科1年 安保 佳菜子)

原水爆禁止世界大会に参加し、多くのことを学びました。戦争の悲惨さ、原爆のおそろしさ、そして平和の大切さです。僕の世代で一体どのくらいの方が参加するのだろうかと思いました。僕が、僕の世代どころか小さな子供や日本人だけでなく、平和を愛する世界各国の人々が長崎に集結しました。その光景を目のあたりにした僕はとても感動しました。若い世代の人の中には戦争についての知識がない人もいました。僕もその中の一人です。しかし知らないからこそ学ぼうとするその姿に感動しました。

僕は周りにいる人達の笑顔を見てみると、とても幸せな気分になれる。だから笑顔がとても大好きです。いつの日か世界中が幸せになれる日を夢みて、平和についてももっと知識を身につけ、僕達若者が先陣をきつて世界中に伝えていくことをここに誓います。

みんなと笑い、みんなと泣いたこ

# 世界禁止爆水原

の原水禁世界大会を僕はきつと忘れ  
ません。

(2科1年 羽下 卓)

初めて原水禁に参加し始めに思っ  
たことは、人の多さ、特に若者の多さ  
には驚き感動した。家の周りで活動し  
ても、一緒にやるのはお年寄りがほと  
んどで若者なんてほとんどいない。実  
際、私の友達に平和などについて話し  
ても『へえ』という感じで興味はな  
い。だから私は興味があるのなんてほ  
んの一部の人でしかないと思っていた  
がそんな事はなかった。仲間がいつば  
いいるんだという気持ちになりとても  
嬉しかった。また、何の繋がりもない  
人たちが平和ということだけでこれだけ集  
まったという事はやっぱり平和は素晴  
らしい事なんだと思った。分科会では  
農家の実態やご飯を三食きちんと食べ  
ることが出来ず、二食にしたために一  
日三回飲むはずの薬が二回になってし  
まっていたり、共済保険をすすめても  
月に千円の保険料が払えないからと断  
る人がほとんどという話など様々な話  
が聞け、どれだけ国民が苦しい思いを  
しながら生活しているのかということ

を感じる事ができた。その原因は  
日本が本来あるべきでない自衛隊や  
アメリカのための思いやり予算とし  
て莫大なお金が使われていることに  
ある。国民が苦しがつているのに国  
は国民の方は見向きもせずアメリカ  
にお金を注ぎ込んでいる。これは本  
当に許せないことだ。お金だけでは  
なく憲法までもアメリカが気に入る  
ように変えようとしている。本当に  
情けなくなってくる。ここは何処の  
国なんだろう……。八十四歳のおばあ  
ちゃんが『若者なんて茶髪にピアス  
でどうしようもないと思っていたが  
この大会に来て若者も捨てたもんじ  
ゃないね』と言ってくれたのが嬉し  
かった。この大会にアレだけの若者  
が参加しているんだから私の友達も  
話していけば少しずつでも変わって  
くれるのではないかと思う。今年二  
十歳になる。選挙権ももらえること  
だし、苦しまずに生活できる日本に  
なるようにこれからも色々な活動に  
参加し仲間を増やしていきたいと思  
う。九日の十一...〇二黙とうの時、  
前日に自分や大切な人が五十八年前  
の長崎にいたと想像してみても言わ  
れた事を思い出した。涙が溢れた。

私たちにとつては被爆は五十八年前  
に起つたことだ。しかし、被爆者に  
とつては五十八年間背負つて生きて  
きていて、それはこれからも消える  
ことはない。どれだけ重いものだろ  
うと思う。最近でもイラク戦争で劣  
化ウラン弾によりたくさんの方が被  
爆した。被爆は本当に小さい子供で  
あつても関係なく命を奪う。これか  
ら生まれてくる命に対してものだ。こ  
んなに命が軽く扱われていいのか、  
すごい怒りを感じる。戦争は絶対に  
イヤだ！これ以上簡単に人を殺すこ  
とを正義と言つたりしないで欲しい。

(1科2年 高原 ゆり恵)



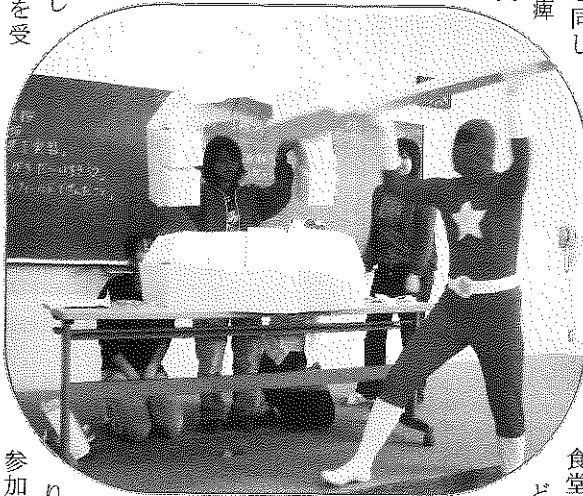
# 第9回 東葛祭

## “燃烧系東葛祭 in 流山”

今年の東葛祭は第九回目で“燃烧系東葛祭in流山”というテーマで行われました。一日目は各クラス学びの発表と田沼祥子さんをお呼びし講演をしていただきました。各クラス学びの発表というのは、日頃実習などがありなかなか交流というものができないので、各クラスがどんな学びをしているのか発表し合い、交流するために行いました。普段知ることができない各クラスの学びを共有することができ、二、三年生は一年生の発表を聞くことで今までの学びを思い出し、初心を忘れてはいけないうと良い体験となりました。そして今回、田沼祥子さんをお呼びし在宅介護について講演していただきました。田沼祥子さんは十三年もの間旦那さんの田沼肇さんの介護を続けた方です。田沼肇さんは進行性核上性

麻痺という難病にかかり在宅での介護を必要とした方でした。この病気はパーキンソン病に非常に似ている病気ですが、一つ違うのが薬がほとんど効かず病状がどんどん悪化してしまふというものでした。今回この東葛祭でなぜ講演していただくことになったのかというと、学生の中で田沼肇さんと同じ

進行性核上性麻痺の患者さんを受け持ち、やはりその方も在宅で療養されていて奥様一人で介護していることがあり、ぜひ田沼祥子さんの講演を聞きたいということになり実現しました。この講演をより深めるために、同じ病気の患者さんを受け持った学生が病気について説明したり、今の介護の現状についてなど発表し全学年で交流しました。田沼祥子さんからは十三年間の介護生活のことをスライドを使いたくさんの写真を見せていただいたり、田沼祥子さんが普段の生活でとても気を使



つていた食事の工夫、毎日の様子さんと肇さんの様子をお話していただきました。そして在宅で療養を続けて行くことがいかに困難であるか、今の制度だけでは在宅介護を十分に支えることができないことなどを学ぶことができました。

二日目は一般公開として、出店や食堂、お化け屋敷、などお楽しみ企画の一日。看護学校ならではの指圧や手話の発表は、たくさんの方達から好評をいただきました。学生が中心となり意見を出し合い、楽しめる東葛祭にしようという準備を進めていきました。実習がありました。実習が足りなかなか準備に参加できない学生や、課題、試験におわれながらも全学年でフォローして頑張っていました。

私達の東葛祭は学生達だけで築いてきたものではありません。学校関係者の方々はもちろん、地域の方達の協力もあり東葛祭は行われています。東葛祭が近づいてくると地域の方達

のお宅にポスターを貼らせていただいたり、フリーマーケットを毎年開かせてもらっています。品物も地域の方達の協力があつてできています。日頃からたくさんの方達の支えがあつて私達は看護の勉強をさせていただいています。その感謝の気持ちを少しでもこの東葛祭で出せればと思いつてきました。今年で第9回ということで来年には第10回を迎えます。来年も今年の東葛祭よりもっと皆さんが楽しんで、学生も思い出に残るような東葛祭にするよう頑張っていきたいと思えます。

（第9回東葛祭実行委員長

米本 悠紀）



# キャッピング セレモニー

2003

キャッピングによせて

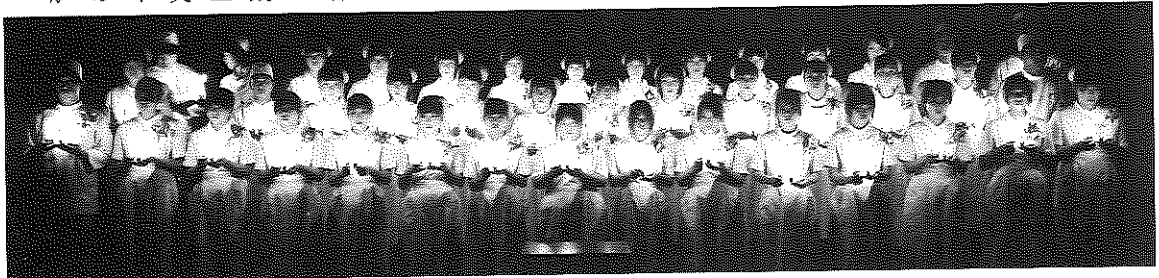
十一月二十九日、第九回キャッピングセレモニーが開催された。キャンドルの灯りの中、新たな決意を胸に前を見つめる学生たちの姿は、とても美しく、希望に満ちていて、参列者は大きな感動に包まれた。

九期生は、社会人入学を受け入れた初年度ということもあり、十八才から三十九才までの縦長のクラスである。看護師を目指す動機も様々であり、目的意識の高い学生もいれば、そうでない学生もいる。ささいなこととトラブルが起きたり、反対にお互いのことに無関心であったりと、迂余曲折をくり返してきた。

学校や授業に少し慣れてだらけ始めた頃、遅刻者が多くて授業ができず、クラスで話し合いをすることになったこともある。担任も入り、「生命を預る看護師を目指す人たちが、こんないい加減なことでもいいのか。」

と迫ると「甘えていた。クラスで起こることは、良いことも悪いことも四十三分の一つの責任があるのだから、お互いに注意しあつて頑張ろう」「毎朝早起きしてお弁当を作ってくれる母のことも裏切っていたんだと思う。皆で信用を回復したい」という決意が聞かれた。その後に行われた基礎Ⅰ実習のゼミでは、「日々の授業や演習を大切にしよう」「看護師も患者さんも私たちの技術を信用し、任せてくれた。患者さんに責任のもてる看護師になろう」と学びを共有した。

また、基礎Ⅱ実習では、看護技術の効果を実感したり、人間の回復力や人の体の素晴らしさに感動をおぼえ、それらをお互いの実践を通して学びあえた。以上のような学びをもとに、実行委員が中心となつて、キャッピングを新たな決意の場と位置づけて話し合いが行われた。



キャッピング合宿では、各々が看護師を目指そうと思つたきつかけについて涙ながらに話し合い、「自分だけならキャップはかぶらなくても良い。でもここで皆と出逢えて、とても幸せだと思つている。キャップに憧れてきた人の思いも大切にしたい。四十三人で迎えるキャッピングだからこそ、皆でキャップをかぶろう」と決議した。そして、悩んだり、ぶつかつたりしながら歩んできた今までをふり返りながら一人一人が決意文を作成し、それを一つにつなげてできあがった決意表明には、今までの学びが凝縮されていた。

セレモニー後の父母懇談会では、例年になく父親の参加が多く、子供の成長やひたむきに生きていく姿へ「こうやって責任のある大人になるのだなと思つた」「家族みんな

に見てもらいたいと言う気持ちがよくわかつた。とても感動した」とたくさんのメッセージが寄せられた。

キャッピングセレモニーを終えて九期生もようやく看護学生としてのスタートラインに立った。学びは、これからますます厳しくなる。実習でも、一年生だからと甘えたことはもう言えない。しかし決意表明の中で「人間的に成長し、将来私達を必要とされる患者さん達の力になれるよう、確かな技術と知識をしっかりと身につけて、四十三人全員が力を合わせ、支え合い、未来への夢と憧れを現実のものにしたい」と述べている。そういう彼らの可能性をこれから応援していきたい。

(1科9期生担任 小淵 尚子)



## 8ヶ月間の学び

「生命活動」

「在宅看護論

フィールドワーク」

### 生命活動の探求

今回、生命活動の発表をするまでに私達は、五月に行った田植え、八月下旬暑い中に行った「関さんの森」などを体験した。自然の生態系や一つの生き物の大切さを学び、自然と直接触れることで身近に自然を感じ植物や生き物は共存し合っていることを学ぶことができました。

そのことにより、人間の生命活動に対しての自然の重要性や人間への理解を深めたい学びがあったと思います。

今回私たちは、人体の構造と機能を8つのグループに分けて、5月より学びを深めてきました。

それぞれのグループが、私たちの生命がすばらしい健康の力によって支えられていること、また、人間の生命活動を全体の諸器官の相互関係の視点で学び、人々が健康に生きるための基礎知識をつけ生命の対平等を学ぶことを目標に、今回の生命活動にとり組んできました。

ここまでたどりつくのに、色々な



苦勞をしました。テーマごとに関連文献より「生命活動」を学んできました。

私は、骨筋グループでした。人間らしいなめらかな動きには、抗重力筋、カルシウムの働きが重要であることが解りました。さらに発表では、寸劇をして私たちの筋肉は普段どのように働いているのかを理解することが出来ました。今まで神秘的に思えた人間の構造機能は、より科学的に理解出来るようになってきたのだと思います。

また、一人だけの学びではなく、グループの中で疑問を出し合い、意見を言い合いながら進めていくことにより、学びを共有し、一人だけでは学ぶことができないグループワークならではの特性を深く知ることが出来ました。

基礎実習では糖尿病の患者さんを受け持たせていただき生命活動で学ん

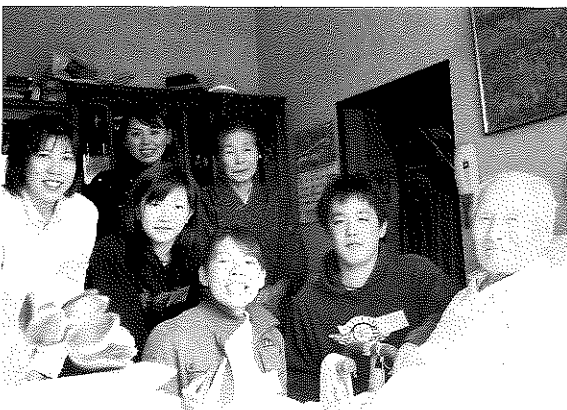
だ内分泌グループの学びが基盤になり学習が進み患者さんに解かりやすいパンフレットを作ることが出来ました。

(2科1年 佐藤 優樹)

### 在宅看護論フィールドワーク

私たちは、「住み慣れた地域で暮らし続けたい」住民の願いを一緒に考え、諸関連部門と力を合わせて実践する看護について考える、を目的に在宅看護論フィールドワークを行った。介護施設訪問ではデイケア、グループホームで、高齢者の方々が生き生きと仲間と過ごしていた。学生が来るのを楽しみにしていた。孤独にならず人と人が交流するのが大事だと学んだ。在宅訪問ではありのままに、利用者や家族とらえる4週間の中で利用者や看護者のがんばりが本当に私たちに伝わってきた。利用者一人一人、自分の願いや、やりたいことがあり、利用者を支える家族にも願いや思いがあることを知った。

ALSのOさんのお宅では、学生が大好きな歌を歌い、手話とダンスで表現しOさんは、ジツとみつめ、目に涙をうかべ、喜びを表わしてくれた。又、家族も涙を浮かべ一緒に歌を口ずさんでいた。そして、家族はOさん中心に考え、全てにこだわりをもち、介護を行っていた。その中にはOさんへの愛情や思いが感じられた。



(2科1年 加茂 初美)

しかし、寝たきりのOさんの介護は家族にとつては体力的につらい長期間となる中で懸命にOさんを支えていると感じた。これらの現状を知って、介護保険制度、医療保障の実際について学習した。日本は税金(消費税金)の中の社会保障費が他国に比べて極端に低いことがわかった。税金は公共事業や軍費などにかかる予算が多い。少しでもその予算が介護保険、医療保障に使われるようになれば、誰でも、安心して在宅で生きる社会が実現すると考えた。在宅フィールドや訪問した利用者を通して学ぶことができたと思う。

領域別実習  
「着実な前進」

九月から四ヶ月にわたって外科・小児・母性・精神と領域別に分れての実習が始まった。戸惑いと不安、緊張など様々な思いを抱えながら実習を迎えた。外科では患者さんの疾患を捉え、術前から術後まで関わり、自分たちにはどんな看護ができるのかを考えさせられた。また、術後の患者さんの回復力の早さには驚かさず、人間の生命力のすごさに触れる事ができた。小児では、子供の年齢になりきって遊ぶ事がいかに大切であるか。夢中になって一緒に遊ぶ事でこどもとの距離が縮まっていくのを実感した。「母性」では実際に分娩に立ち合い、生命誕生の瞬間に感動した。自分達が生きてきた過程を垣間見ることが出来た。精神では、患者さん一人一人を一人の人間としてみることの大切さを学んだ。患者さんほとても純粹で素直で自分の心がまるで洗われるようだった。

このような領域別の学びをクラスゼミで交流した。一クールめは、外科と精神のゼミだったが、まだ行っていない科の中身は用語すらわからず圧倒されるばかりだった。質問も事前学習をしていればわかる中身のものも多く、ゼミ委員としてもどうやったら良いゼミになるか検討。事前学習をしてのぞむことや、ゼミ委員で事前に学びの交流をした上でどんなテーマですすめていくのか確認しあったことで意見交流ができ、活発なゼミとなってきた。この領域別実習では、グループで共に過ごす時間が長い。四ヶ月間、同じグループで過ごす日々は決して平坦なものではない。時にはぶつかり合い、助け合い、グループとしての存在、個々



の存在をお互いが見つめ直す事ができたと思う。相手の行動を見ながら自分を振り返る事の大切さ、グループでなければできない何かを成し遂げた時の達成感はこの実習でなければつかめなかつたと思う。グループで学ぶ事、チーム看護をしていく上で重要である事も確認できたように思う。この四ヶ月の実習の中で達成できた課題、まだまだ足りないと思う課題、そして一人の人間としての心の成長を実感している。私達は着実に成長の一步を踏み出した。これからもますます前進していきたい。

(1科2年 宮川 真里)

第6期学生自治会

九月に開かれた自治会総会で、新役員に一年生を迎え六期自治会となりました。六期自治会の最初の活動として、前自治会役員と六期自治会役員とで、東葛祭の時に学校案内を行いました。これからも続けられること、また毎年東葛祭に多くの高校生が来てくれているという事でこの活動をする事にしました。当日は多くの高校生が来校しており、東葛看護学校に興味を持ってきてくれる方がたくさんいることが分りました。

学校案内を行うこと、東葛祭を見て学校の雰囲気を感じてもらうことで少しでも東葛看護学校について知っていた、だけたと思えます。

また前自治会に引き続き禁煙所の問題についても話し合いをしています。構内にはもう喫煙所を置けないということ以外に喫煙する場所を設けたのですが、喫煙マナーが悪くたくさんの苦情がきているのが現状です。マナー改善のためにポスターを作成し学校中に掲示したり、各クラスで喫煙マナーについて話し合いをしてもらうように働きかけをしています。ですがなかなかマナーが改善されません。喫煙マナーについてももう一度考えてみてください。

これからも様々な活動をしていきたいと思うので学生自治会をよろしくお願いします。

(自治会会長 利行 理子)

会長	利行 理子 (1-1-2)
副会長	安藤 裕子 (1-1-2)
書記	岡田 直樹 (1-1-1)
	中川 圭 (1-1-2)
	蓮場都美子 (1-1-1)
	小澤 弘規 (1-1-2)
会計	安保佳菜子 (1-1-1)
	池田 素子 (1-1-2)
会計監査	清水 康博 (1-1-1)

# 平和と医療」を学ぶ 研修旅行

2科2年生（8期生）

9月16日～19日

私達2科8期生は、日本で唯一地上戦が行われ大勢の犠牲者を出した島、沖縄に行き先を決めた。私達は「日本がどう戦争へと向かっていったのか」「沖縄の文化や歴史」「米軍基地」に関して旅行前に学習した。日本は国外へ市場を広げようと戦争をした。そのためにも天皇を神とし、徹底した軍国主義教育を行っていた。その教育のもと、天皇を守り本土への地上戦を防ぐために沖縄が激戦地となった。「捨石作戦」と呼ばれ沖縄や朝鮮の人々の尊い命が奪われた。戦後「日本を守るため」という日米安保条約が結ばれたが、実は安保条約に基づく米軍基地は「アジア諸国を攻撃しやすい軍事拠点」であると知った。学べば学ぶほど恐怖や怒り等様々な感情がこみ上げてきた。そして沖縄へと旅立っていった。南部戦跡めぐりでは、ひめゆりの塔、第一外科豪、糸数の豪、平和記念公園を見学した。特に私達が胸を痛めたのは、平和記念資料館での犠牲者の写真だった。十五歳前後の少女や少年一人ひとりの生前の写真に、どのように亡くなったのかが書かれていた。その中に『自分は皇国の女だから殺せ』と言

い敵に射殺された」とかかれた写真もあった。当時の天皇崇拜の教育を改めて感じたのと同時に、そうやって尊い命が奪われたことが悲しかった。糸数の豪では、実際に豪の中に入った。足元は滑り、懐中電灯をつけても隣の友達が見えなかった。その豪の中で灯を消し、当時と同じ状況の真つ暗な豪を体験した。みんな懐中電灯を消すと、恐怖で誰かがすぐに電気をつける：「恐い」という声があちこちで上がった。しかし当時は、十代の少女たちがこんな中で傷病兵の看護や水汲みなどを、ウジがわく中で行っていたのだ。



こんな所でまだ若い少女たちが働いていたなんて信じられなかった。辺野古の海にも行った。砂浜は、とってもきれいで天然記念物のヤドカリやサンゴが溢れている。海にはジュゴンも訪れる。しかしその美しい海が米軍基地の建設予定地となつている。海の命・海に生かされている私達の命を守るために、命を奪う軍隊（米軍基地）を置かすものかと、おじいやおばあが日に日に衰えていく体をひきずりながらも闘っている。そんなおじいに言われた言葉があった。「今の若い者を見ると腹が立つ。平和ボケしている」と。私達は、シヨックを受けた。同時に、本当に平和ボケしている自分と無知だった自分に気付いた。私達はこの研修旅行で多くの事実を知り、学び、感じた。だから今ならわかる。自衛隊のイラク派兵は私達の問題だ。他人事じゃない。侵略戦争への参加だ。イラクの人達を殺すことになる。自衛隊員が死ぬことにもなる。私達看護師も戦場に連れて行かれる。これを止めるには私達一人一人の出来ることから行動を始めなければならぬと思う。学びの分だけ遊びも満喫し、海！買い物！ビール！と最高の沖縄だった。

（2科2年 江ヶ崎 裕美子）



# 沖縄「日本国憲法と

1科3年生（7期生）

10月7日～11日

1科7期生は、「平和と医療」をテーマに沖縄へ研修旅行に行ってきた。一日自由行動もあり、学びと遊びの両方を満喫した五日間でした。

沖縄で、実体験した方の話しを聞いて、戦争は沖縄の人々の生活に今でも大きな影響を及ぼしていること、また安保条約や日米地位協定があるために、今の沖縄が厳しい立場にあるりそれは日本全体の大きな問題だと感じる事ができました。そして戦争や基地問題、環境問題を通して7期生が学んだことは、人間やジュゴン、サンゴなどの生命の大切さでした。「命どう宝」つまり「命こそ宝」という言葉は、7期生の宝物となりました。

元ひめゆり学徒隊員の宮良ルリさんの講演では、「両手、両足切断、胸のあたりを怪我し、息をするたびにジュウジュウ泡が出る人、火炎放射弾をあび肉がブラ下がり包帯だらけの人が何人もおり、治っていく人はほとんどいなかった」などの話しを聞き、体中に鳥肌がたち目の前に戦争の光景が浮かんで来るようでした。話し最後に、「次は、皆さんにしっかりバトンタッチをしましたよ。お

願いな」との言葉に、ずっしりとくるものがありました。

識名壕へは、皆がしゃがんできつきつに座り入りました。暗闇、狭さ、蒸し暑さ、不気味さから早く出たくて出たくてたまらず、糞尿や死体の臭い、傷口の腐る臭いが、戦争中は壕の中に充満していたと思うと、当時の状況が目に浮かぶ様でした。

普天間基地移設予定地の辺野古では、「命を守る会」の金城さん、富田さんから「無知・無関心では平和は守れない」「日本から出発した米軍が、フィリピンに来て人を殺している。だから日本人は、人殺しの手伝いしているんだ」と指摘を受けたという話しをうかがいました。日本の基地から外国へ行き、人殺しをしている事実、その基地に加勢しているのが今の日本だと明確になり、憲法が守られているのかと考えさせられた時間でした。

沖縄協同病院訪問では、沖縄の医療の歴史と現状、経済力が弱く男性の自殺率が高いなどの実態を知りました。医療活動、健康を守る運動と平和を守る闘いは同じ道。だからこそ憲法を守る医療人、人権を守る医療人として、自分自身を育てていきたいと思つた研修旅行でした。

沖縄民医連の方々との交流会もあ



り、エイサー踊りや、力強い大太鼓、三線、かすりの衣装、オリオンビールなどなどあの時の音楽、笑いはいつまでも私達の心に残ることでしょう。青い空、レースのような白い波、紺碧の海、沖縄の自然は本当に素晴らしい、研修旅行を成功させようとクラス皆の思いが一つになった五日間でした。

（1科7期生担任 深谷 京子  
江島 典子）

## 憲法第九條は世界の宝

憲法・教育基本法の改悪を

許してはならない

日本国憲法は、「平和憲法」です。しかも世界でもっとも徹底した戦争放棄、非武装をきめた第九條を持つ憲法です。これは言うまでもなく日本が行った侵略戦争、戦争の悲惨さへの深い反省に立ち、二度と戦争を起こさない国になって欲しいという世界諸国民の願いを受けて制定されました。

「日本がもし憲法第九條をなくすための国民投票を実施するようになれば、真の投票者はアジアの諸国民でなければならない」

これはフィリピンの国会議員であったポニファシオ・ギリエゴさんが、日本の教師たちにあてて書いた手紙の一節です。もちろん国民投票の法的な権者は日本国民です。しかしこの言葉は、日本の侵略に苦しんだアジアの人びとの心をよく伝えています。いま戦火にさらされているイラクの人びとや中東の人びとは驚くほど広く、第九條のことを知っているといえます。そして「第九條のおかげで平和な日本がうらやましい」と言うそうです。「その日本がなぜイラクに派兵するのか」アジアの人びとは今、日本が第九條を捨て去るのではないかと、恐れをもつて注目しているのです。

石原都知事がつい先ごろ「日本の朝鮮支配は人道的なものだった。」などと暴言を吐きました。韓国の人たちの驚きは、その言葉のひどさだけに向けられたのではありません。そういう誤った認識をもつ

た人が都知事になり、人気がでている日本の社会の雰囲気は驚いているのです。日本の社会が、そのような暴言をゆるす社会になってしまったのかと。

新しい憲法をつくる過程で、教育の大切さが改めて浮びあがってきました。過去のあやまちをしつかりと見つめ、平和と民主主義の心を身につけた国民こそが、憲法を支える唯一の力なのだ。この自覚の下につくられたのが教育基本法です。憲法の理想の実現は「根本において教育の力にまつべきもの」として、平和と人間の尊厳、個人の価値などに目覚めた国民を育てる教育に、教育を根本的に転換させたのです。

いま自衛隊のイラクへの派兵がたくらまれていきます。イラクは戦場です。そこへ武装した自衛隊がいくのですから、交戦状態になることは十分予想されます。九條があるかぎり交戦はできません。いよいよ九條が障害になってきたのです。だから九條を最大の眼目に改憲の動きが急浮上してきています。

それとともに、戦争参加を受け入れる国民をつくらなければなりません。そのためにもっとも邪魔なのが教育基本法です。ですから改憲（九條放棄）と結びつけて教育基本法改訂の動きも起ってきています。その眼目は、個人の価値よりも「お国のために」の方に重きをおき、国のために犠牲になれる国民をつくるということです。すでに「愛国心」の評価を通知票に入れる動きも一部の小学校で起っています。「オクニノタメ」に生命を捧げる教育の再来を、決して許してはなりません。

## 編集後記

第9回キヤッピングセレモニーがクラスみんなの意志を集めたさわやかな決意表明で大きな感動のなかおこなわれました。ご家族の出席も北海道から沖縄まで全国からおいでいただき過去最高の出席数でした。父母懇談会では例年になくお父さんからわが子の成長をいとおしむ熱い思いがたくさん語られ、看護師の労働実態のきびしさに立ち向かうであろう将来に、不安と、しかしわが子にたいする誇り高い信頼にみちた応援を実感することができました。

折しもイラクで若い日本人外交官二人が殺害されました。看護の仕事も、外交官の仕事も人権と文化を豊かに育てていく仕事です。いかなる理由であれテロは絶対に許せません。イラク情勢の根本要因に、国連憲章に基づかず平和のルールを踏みこじつた米英軍の侵略戦争と、無法な軍事占領支配が指摘されています。小泉内閣は国民の憲法九條を守れの理性の声を無視しつづけ依然としてブッシュ政権に追随しイラク派兵を強行しようとしています。

夢に描いた職業にむかつて懸命に学ぶ青年の未来を戦争が奪うことを断じて許してはならないと思います。志なけば暴力の連鎖の犠牲に倒れたお二人に哀悼の意を述べるとともに、平和の声を、行動を、起こしていきたいと思います。

（学校通信編集委員会）

山田かおり、徳丸美津子、久保知代恵